

平成 28 年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部
教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

平成 29 年 7 月

目次

はじめに……………	教育支援室インターンシップ専門委員(文学研究科教授)	片山 剛	1
1 音楽関係			
1.0 音楽関係インターンシップ概要……………	文学研究科教授	伊東 信宏	2
1.1 京都コンサートホール インターンシップ報告 ……………	文学部3回生(音楽学)	吉見 奈恵	3
1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告 ……………	文学部3回生(音楽学)	中原 瑞彩	8
2 演劇関係			
2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロ劇場)劇場制作研修 ……………	文学研究科教授	永田 靖	12
2.1 劇場制作研修 受講生のレポート①……………	文学部4回生(演劇学)	宮本 蒔	14
2.2 劇場制作研修 受講生のレポート②……………	文学部2回生(演劇学)	廣嶋 萌衣	18
2.3 劇場制作研修 受講生のレポート③……………	文学部2回生(演劇学)	矢口 奈津実	22

はじめに

本報告書は、平成 28 (2016) 年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募する形で行われる「インターンシップ」も、近年増加していますが、本報告書は、文学部・文学研究科の授業の一部として実施されているインターンシップの報告をとりまとめたものです。平成 28 年度の実習先、人数、期間は以下のとおりです。

音楽関係

○いずみホール	学部生 1 人	5 日間
○あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール	学部生 1 人	5 日間
○京都コンサートホール	学部生 1 人	5 日間

演劇関係

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場 (ピッコロシアター)	学部生 3 人	5 日間
---------------------------	---------	------

報告書を読みますと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れます。皆様に味読をお願いする次第です。そして、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。なお、いずみホールでのインターンシップの報告書は、本報告書には掲載されませんが、例年同様、いずみホールには提出されておりますこと、念のため申し添えます。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まりますが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは 18 年度です。そして 18～28 年度の 11 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきました。ただし映画関係のそれは、26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されておられません。参考のために、18～28 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておきます。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	小計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	42
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	35
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	7
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	91

(単位修得を目的とせず、インターンシップに参加した学生の数を含む)

教育支援室インターンシップ専門委員 (文学研究科教授) 片山 剛

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科（音楽学研究室）教授 伊東 信宏

音楽に関係するインターンシップは、今回も例年どおり、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、3名の学生について実施した。授業科目としては、後期月曜3限に開講している「音楽学演習」受講生を母体としている。以下にはザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ、受講生からの報告を掲載する。

インターンシップ全体の経緯を時系列に即して次にまとめておく。今回も、報告会が平成29年度にずれ込んだが、これは昨年度末、国際会議開催などで筆者の時間がなかったからである。

- ◆ 4月「音楽学演習」（前期）の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は3名の希望者があった。その後、それぞれの研修先を決定した。
- ◆ 2016年10月20日（木）～10月25日（火）（23日（日）を除く）の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2016年11月21日（月）～11月26日（土）（25日（日）を除く）の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2016年11月26日（土）～11月30日（水）の5日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2017年5月2日（火）、上記3つのインターンシップについて、音楽学研究室の総合演習において、受講者3名が報告。

筆者は、ここ数年、インターンシップ以外にも社会学連携活動に関わっており、学外の公共ホール、音楽ホールの方々と話す機会がある。そういう中で感じるのは、社会の中での音楽の位置、あるいは大学（生）の位置が大きく変わってきている、ということである。インターンシップはそういう意味でも重要性を増しているように思う。

受け入れていただいたホールのスタッフの方々には、今年も大変お世話になりました。深くお礼を申し上げます。

1.1 京都コンサートホール インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 音楽学専修 吉見 奈恵

1. 概要

日時：2016年11月26日（土）～11月30日（水）（5日間）

場所：京都コンサートホール

2. 京都コンサートホールについて

1995年に完成した京都市下最大級のコンサートホール。大ホールとアンサンブルホールムラタ（小ホール）がある。座席数はそれぞれ1833席、510席であり、大ホールでは大型のオーケストラ、小ホールでは室内楽、小編成のオーケストラを中心に公演が行われている。

大ホールはヨハネス・クライス社製の90ストップのパイプオルガンを擁する。この90のストップの中には尺八、笙、しちりき、篠笛など、和楽器テイストのストップもあり、京都ならではのパイプオルガンである。

京都市交響楽団の本拠地でもある。

指定管理者制度により公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が管理を行っている。

3. 指定管理者制度について

2003年地方自治法が改正され、指定管理者制度が導入された。地方公共団体の指定に基づき、特定の団体が公共施設の管理を行うことを認めたルールである。住民のサービス向上と経費の節減が主な目的。その団体による管理がこの目的にかなっているのかという基準から定期的を選定が行われる。

京都市では2006年から導入されている。

京都コンサートホールもこの指定管理者制度のもとに運営されているが、現段階では非公募で京都市音楽芸術文化振興財団が指定されている。非公募の理由としては「京都市交響楽団の活動拠点であり、また、(公財)京都市音楽芸術文化振興財団が京都市交響楽団の事業運営を担っているため、同財団が指定管理者となることが、施設の管理運営上、最も効果的かつ効率的であるため」(公の施設の指定管理者制度の活用状況等一覧より)とされている。

同財団はこの制度により、6つの施設（東部文化会館、呉竹文化センター、西文化会館ウエスティ、北文化会館、右京ふれあい文化会館、ロームシアター京都）の管理を行っているが、特に京都コンサートホールはクラシックに特化している、とのことである。

4. スケジュール

【1日目】11月26日（土）8:30～17:15

- ・オリエンテーション、施設説明
- ・新聞チェック業務
- ・施設見学
- ・チラシの挟み込み
- ・グッズ販売

【2日目】11月27日（日）8:30～17:15

- ・新聞チェック業務、チラシの追加
- ・エントランス準備
- ・レセプション業務
- ・グッズ販売

【3日目】11月28日（月）8:30～17:15

- ・新聞チェック業務、チラシの追加
- ・エントランス準備
- ・事業企画レクチャー
- ・ホール・舞台見学
- ・打ち合わせ同行

【4日目】11月29日（火）13:15～22:00

- ・舞台業務

【5日目】11月30日（水）13:15～22:00

- ・クリスマス装飾
- ・ホームページ作成
- ・レセプション業務

5. 公演概要

1日目、2日目

京都市交響楽団 第607回定期演奏会

主催：公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団／京都市

指揮：高関健

共演：児玉桃（ピアノ）原田節（オンド・マルトノ）

会場：京都コンサートホール 大ホール

内容：曲目は両日ともに、トゥーランガリア交響曲（メシアン）。

オンド・マルトノの音を生で聞くのは初めてだった。

独特な浮遊感のある音が漏れ聴こえてきて印象的だった。

3日目は公演なし

4日目

驚異のセッション

主催：京都新聞

共催：公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団／京都市

企画：京都新聞 トマト倶楽部

協力：エラート音楽事務所

出演：山下洋輔、日野皓正、藤舎名生

会場：京都コンサートホール 大ホール

内容：曲目は「ボレロ」（M.ラヴェル）、「鳥の歌」（カタロニア民謡）、「佐渡の世阿弥」ほか。トランペットと横笛、ピアノと横笛の合奏を聴いたことがなかったのが驚いた。

5日目

京響フルハップ

主催：日本フルハップ

指揮：下野竜也

ピアノ：アレクサンデル・ガジェヴ

出演：京都市交響楽団

会場：京都コンサートホール 大ホール

内容：曲目：ピアノ協奏曲第27番（モーツァルト）、交響曲第3番『英雄』（ベートーヴェン）ほか。

日本フルハップの関係者の方のみのコンサート。普段クラシックに馴染みがないお客様が多く、強い期待感が伝わってきた。

6. 活動報告と感想

1日目

まず、オリエンテーションとして施設の説明をしていただく。指定管理者制度に基づいて管理が行われていることや多くのお客様にご利用いただくために工夫されていることを伺った。公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団ではロームシアター京都の管理も行われており、両方の拠点でどちらのチケットも購入できるように

されていることや、インターネットでのチケット販売も行われているとのことである。

新聞チェックは毎朝事務所に届く新聞をチェックし、クラシック音楽や、京都コンサートホール、ロームシアター京都に関連する記事を抜粋してまとめる作業だった。はじめは不慣れだったこともあり、時間がかかってしまったため次の日からはスムーズに行えるよう努力しようと思った。

グッズ販売ではちょうど「京都の秋 音楽祭」の期間中であったため記念グッズを販売した。

公演を楽しみにされているお客様の笑顔に触れることができ、印象的だったことを覚えている。

2日目

チラシ追加含め、エントランス準備の業務に初めて携わる。追加するチラシの種類が多く、改めて数多くの公演が行われているのだと実感した。

レセプション業務では他のレセプションの方々の姿が印象に残っている。常に緊張感を持ち、各方面に意識を向けながらも、お客様に対して明るい笑顔を忘れず接されている姿に感銘を受けた。私はご来場されたお客様にチラシを渡す業務についたが、そんな皆さんの姿勢に少しでも貢献できるようにと笑顔でお声がけした。

3日目

事業企画を担当されている方にお話を伺う貴重な機会をいただく。

企画をするうえで「継続と新しいこと」の両方を意識されているというお話が印象的だった。

今まで継続してきた中で形成されてきた、お客様が求められていることと同時に新しいものとの出会いも提供できるように意識されているそう。

そのため若手の作曲家の方の現代音楽の作品を公演されたこともあったとおっしゃっていた。

私自身の実感として新しい音楽に出会うとなると本人がよほど意識的に動くか、外からの働きかけがないと難しいと感じる。強固な「個人のテイスト」というものに対して挑み続けられている姿から学んだことも多い。

また、舞台打ち合わせに同行させていただいた。

全同志社メサイア演奏会の打ち合わせで同世代の方々が積極的に意見を交わされている姿に刺激を受けた。

4日目

驚異のセッションのお手伝いをさせていただく。公演の進行を舞台袖で見学させていただいた。

演奏者の方々が目の前にいらしたため、快適に舞台に上がっていただけるよう細心の注意を払った。

照明の転換とホール内でのアナウンスを見学させていただいた。アナウンスだけでなく照明の明るさもお客様に「これから始まる」ということを意識していただく効果があり、進行の一部なのだと学んだ。

モニター越しにお客様の反応が見えたが、楽しまれていることが分かって、私自身思わず笑顔がこぼれた。

5 日目

エントランスに飾るクリスマスツリーの装飾を行った。

一人でも多くのお客様に見ていただけるように、と思いながら飾り付けた。事務所の方々と楽しくコミュニケーションをとりながら飾り付けられたことが印象に残っている。

午後はレセプション業務に入り、チラシ渡しについた。2 日目補助に入っていた点も自分で何とか行えた。

7. 全体を通しての感想

京都コンサートホールではお客様や演奏者の方との信頼関係をととても大切にされている印象を受けた。公演後のレセプションの光景など、お客様と演奏者の方、指揮者の方との関係も深く、人と人で繋がっているあたたかさを感じた。

前田さんをはじめ、事務所の方々には業務の合間にたくさんお話をさせていただいたが、共通して伝わってきたのは音楽に対する強い愛情だった。まだまだこんなことができる、こんなことをやってみたいという思いを聞かせていただき、大きな刺激を受けた。

これから社会に出て行くが、ここで教えていただいたことに恥じない社会人になりたいと思う。

1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 音楽学専修 中原 瑞彩

【研修先】

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

【研修期間】

平成 28 年 11 月 21 日（月）～11 月 26 日（土）

【ホール概要】

場所：大阪市北区西天満 4-15-10

開館：平成 7 年 5 月 13 日

席数：1 階 168 席、2 階 133 席 合計 301 席（最大 335 席）

構造：乾式浮き構造

【研修最終日の公演】

公演名：「須川展也 サクソフォンアドベンチャー」

公演日時：平成 28 年 11 月 26 日（土）

14:00 開演／13:30 開場

会場：あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

入場料：一般 4,000 円、ザ・フェニックスホール友の会価格 3,600 円、学生券 1,000 円

出演者：須川展也（サクソフォン）、小柳美奈子（ピアノ）

【研修内容】

第一日 11 月 21 日（月）午前 9 時～午後 5 時

- ① ホール職員紹介（全体朝礼）
- ② ザ・フェニックスホールの概要
- ③ ホール内案内・機械室等
- ④ 自主企画事業、公演広報、サロン打ち合わせ、インタビュー（日経）

第二日 11 月 22 日（火）午前 9 時～午後 5 時

- ① 機関誌「サロン」について
- ② 貸館事業、貸館受付、インフォメーション制作、HP

第三日 11 月 24 日（木）午前 9 時～午後 5 時

- ① チケット業務

② 自主企画事業、公演広報

第四日 11月25日(金) 午前9時～午後5時

- ① 著作権、友の会組織、運営
- ② 自主企画公演会場設営、挟み込み

第五日 11月26日(土) 午前9時～午後7時

- ① 自主企画公演 準備、公演
「公演当日の対応について」を研修テーマとして
ホール内準備、公演本番・終演後対応の実務実習

【研修内容詳細】

第一日

インターンシップ初日は、社員の方との挨拶を済ませたあと、全体朝礼で進捗報告を聞いた。報告内容は主にチケットの売り上げ状況についてで、販売枚数が書かれた表が配布され、その表をもとにこれから販売に力を入れる公演を確認した。

その後、ホールの概要についての説明を受けた。同ホールの設置に至った経緯、運営の基本方針、将来の方向性などについてお話を伺った。

午後からは、ホール内の設備を見学し、機械室にも通していただいた。室内楽サロンという性格をもつコンサートホールとして、飲食ができるバーカウンターやポール・ギアマンの壁画などからその雰囲気を感じ取ることができた。

内覧の後には、ホールが刊行している情報誌「サロン」の打ち合わせに同行した。打ち合わせでは、巻頭インタビューを依頼するアーティストの選定について主に取り上げられた。そのあとは、一カ月後に控えたレクチャーコンサートに向けて、企画・構成された伊東先生と日本経済新聞の記者の方による取材の場に同席させていただいた。

第二日

午前には、機関誌「サロン」についての説明を受けた。設置場所や発刊までのスケジュール、掲載内容についてお話を伺った。

午後は、貸館事業について説明を受けた。貸館事業の年開催数や受付基準、料金設定についてお聞きした。また、コンサートを企画するワークショップを行い、一つのコンサートにかかる費用を実感することができた。

第三日

午前には、チケット業務についての説明を受けた。実際に使用している顧客管理ソフトを触りながら、チケット予約までのシステムの動きを確認した。

午後は、自主企画事業についての説明を受けた。チラシから公演について読み解くワークショップを通じて、一つのホールの性格や存在意義に密接にかかわる自主企画の構成について学ぶことができた。

第四日

午前は、友の会や著作権についての説明を受けた。著作権申請は事前に行うのではなく、その日用いられた曲目を公演後にまとめて申請するというところに意外性を感じた。

午後からは、別室に移動し挟み込み作業に参加した。他のホールから送付されてきたチラシをまとめていき、最後に公演の冊子に挟み込むという流れで行った。その後フェスティバルホールに移動し、今度はそのホールで行われる公演の際のチラシの挟み込み作業に参加した。ホール同士のコネクションの強固さや、人々が様々な音楽に触れられるようにするつながりの重要性を感じる事が出来た。

第五日

最終日は自主公演企画の実務実習で、朝から公演の準備に加わった。あらかじめ作ってくださったインターン生特別のタイムスケジュールに合わせて動いた。四日間の実習を通してホールの運営について理解はできていたものの、実際の公演がどのように進み、どのようなどころに気を配りながら進めるのかということがつかめていなかった。しかし、この一日で公演の様々な側面を目にし、具体的に理解することができた。

公演のあとはアフターイベントが用意されており、須川さんのレクチャーを受けたり、ともに演奏したりできる機会が提供された。参加した人は中高生から40～50代ぐらいまでと、幅広い年齢層の方が見受けられた。

【全体の感想】

五日間のインターンを通して、音楽ホールの存在意義に対する気づきや課題に触れることができた。一つは、このホールの主な聴衆は高齢者層だということだ。その中でも特に、定年退職をされており、芸術に造詣の深い方が多いとのことだった。このような顧客層を受けて、ホール側も生のコミュニケーションを重要視しており、電話でのチケット受付や公演当日のスタッフの方による気遣いなど、様々な局面でそれを感じ取ることができた。

その一方で、若年層をどう取り込むかということがこのホールの課題だ。現在このホールでは、クラシックや室内楽が中心に扱われている。しかし、こうした類の音楽は必ずしも若年層に好まれるものとは言えない。私の提案として、一つは若年層の嗜好に合わせてポップやロック要素を入れた公演を開くことを思いついた。しかし、ホールの設立理念やコンセプトの観点からどのレベルまで譲歩するかという点が新たな問題となってくる。もう一つの案は、軽度の制限（～歳以下、またその年齢に当てはまる人物の同伴者のみ可、など）を設けて有名な曲を扱う公演を開くことだ。現在の顧客層から考えると収支面で難しいかもしれないが、耳馴染み

のある曲だけに絞ることで、若年層のクラシック音楽への関心を高められると考えた。また、参加条件を設けることで、高齢者層は必ず若年層とともにチケットを購入せねばならず、親子のコミュニケーションの場や、子から親へのプレゼントとしても成立しうる企画だと考えた。

このような現状に接して、音楽ホールは自身の今後を決める選択を迫られているのだということが感じ取れた。このまま一定の聴衆層にターゲットを絞りながら運営を続けていくのか、それとも、ホールのコンセプトを曲げてでも新たな方向性を見出していくのか、それが今後のホールの命運を分けるのだと感じた。それはホール関係者だけでなく、われわれ聴衆の関わり方によっても決まる。巷で流行している楽曲だけでなく、自らの生活と関わりの少ないものに目を向けることも大切だ。そして、そのような文化に出会ったとき、その空間に身を浸し心からその音楽を楽しむ。そうすることで、聴衆とホール関係者がともにコンサートホールでの音楽への関わり方を変えていけるのではないだろうか。公演でのアフターイベントで、中高生が進んでセッションに参加し楽しみながら演奏する姿に、今後のホールの未来が見えた気がした。

2 演劇関係

2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）劇場制作研修

文学研究科（演劇学研究室）教授 永田 靖

概要

演劇学研究室では、授業「劇場制作研修」の一環として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2016年度は、兵庫県立ピッコロ劇団第56回公演、上原裕美作、岩松了演出『砂壁の部屋』を題材に、10月25日～28日（4日間、初日27日）の期間に実施した。

目的

「劇場制作研修」では、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②（事前に学習しておいた）作品が制作現場ではどのように解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まってしまうか。③稽古最終日（ゲネプロ）と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受けとめていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題についての理解とビジョンを持つことを目的としている。

授業の進め方

年度当初にピッコロ劇場側と研修を実施する公演や日程、おおよその研修内容について相談し、1学期中には学生に案内する。その上で、まず研修受講生に対してオリエンテーションを行う。10月18日のオリエンテーションでは、授業担当者（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時に今回の研修に関する必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。

10月18日の演劇学後期授業「観劇実習」において、今回の上演作品である『砂壁の部屋』（上原裕美作）についての作品分析を行う。研修受講生の3名はこの授業に出席し、ここでの演習を受けて作品理解を深める。

10月25日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。研修の3日目（10月27日、公演初日）には、演劇学演習「観劇実習」受講者が初日を観劇する。インターンシップ受講生はすでに劇場内において制作業務を実施しており、研究室の学生たちを観客として受け入れる仕事を行う。普段教室内では同じ立場にいる学生たちが、初日にはそれぞれ制作者（受付、チケット

トもぎり、場内案内者など)と観客という異なる立場に立つことで、演劇公演という「出来事性」(ヴィルマー・サウター)についてその一回性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、授業「演劇学演習」において、インターンでの経験について、劇場の概要、作品の特徴、劇団の方向性などについて簡単に報告し、ディスカッションを行う。制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、相互に議論し、上演作品の芸術的特徴が、立場の違いによっていかに異なったものとしてあるのかを理解する。

成績評価

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者(学生)は観劇レポートを執筆する。授業担当者(永田)はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

謝辞

今年度もピッコロ劇場制作部の皆さんには大変お世話になりました。お陰様で有意義な研修になりました。受講生は皆充実した研修であったことに大変満足しております。次年度も何とぞよろしくお願い致します。

2.1 劇場制作研修 受講生のレポート①

〔学生からの報告〕

文学部 4 回生 演劇学専修 宮本 蒔

はじめに

10月25日から兵庫県立尼崎青少年創造劇場にて4日間のインターンシップに参加させていただいた。私がこのインターンに参加を希望した理由は3つある。まず、第一の理由は、日本社会が短期間で目に見える実利性や利便性を追求する方向へと傾いてきているなかで、舞台芸術活動が社会にどのような意味を持ちうるのか私なりに考えてみたかったからだ。また、舞台芸術に対する社会全体の理解を深め、人材や財源の充実を図って、より良い芸術環境を実現するにはどうすればいいのかということについても興味があった。さらに、日本の演劇作品や演劇界の質の底上げを図るうえでどのような工夫が必要なのかということについても興味があった。

4日間のインターンでは、職員の方々に文化行政について日々疑問に思っていることを直接質問させていただくことができた。このレポートでは、まず、4日間のインターンの内容を概述したうえで、インターンを通して考察したことを記述する。さらに、インターンを経て、より良い舞台芸術環境の創造のために今後必要だと考えられることを記させていただきたい。

インターンの内容と『砂壁の部屋』

インターン1日目は、まず日本の文化施設についての説明をしていただき、主にオーストラリアと日本の演劇制作の特徴や文化行政の違いについて理解を深めた。その後、事業企画の意義についてお話を伺ったり、バックステージツアーを通して現場の声を直接聞かせていただいたりした。また、1日目の最後には、演劇学校が地域演劇の人材育成の場としてどのような役目を果たしているかについてのレクチャーも受講した。

2日目は、まず、兵庫県の文化行政について説明していただいた後、チラシ等の挟み込みの作業を行い、午後からはサポートクラブや、舞台技術学校についてお話を伺った。

3日目は、利用者にとってよりよい劇場施設にするための職員の心構えについて話をさせていただいた。また、吉森副館長からは、財源面についての説明をしていただき、文化行政の重要性を社会全体に説明する難しさを認識した。

また、職員の方々にお願いしてゲネプロと本番を両方見させていただき、作品が観客に届けられるまでにどのように変化するかを観察することができた。やはりゲネの段階では、俳優のはけるタイミングと音響や照明のタイミングが少しずれていたり、俳優の舞台上での会話がリズムミカルに進んでいないように感じられる場面もあつたりした。しかし、観客が入り、本番が始まると、照明や音響と俳優の演技がきちんとかみあうように調整がされていて、俳優同士の会話にも観客の集中力を集めるような求心力が感じられるようになっていた。さらに、インターン3日目と4日目の公演の際には、開演準備やチケット切りなどの制作の仕事を体験させていただき、お客様に気持ちよく観劇していただくために、制作側には細かい段取りや丁寧な心配

りがあるのだということに気づかされた。

今回上演された『砂壁の部屋』の戯曲は、尼崎市が主催する近松賞を受賞した作品だ。大阪の今里新地で育った主人公の成長を描いたこの作品は、都市のさまざまな社会的問題を、童話のようなフィクショナルなタッチと温かみを感じさせる関西弁で描いた作品だ。ピッコロシアターは地域に舞台芸術を根付かせることを目的の一つとして建てられた劇場であるが、京阪神の言葉や地元の歴史を織り交ぜた近松賞受賞作品をピッコロシアターで上演することで、作品が内包している芸術と地域社会の問題がより一層強く結びつけられていくように感じた。

インターンを通しての考察

今回のインターンを通して最も印象的だったのは、ピッコロシアターに対する職員の方々の愛情と情熱の大きさだ。どの職員の方々のレクチャーからも、地方の文化行政をよりよくしたいという熱意が感じられ、地域の芸術の場としてのピッコロシアターに対する誇りが言葉の端々から伝わってきた。また、学校帰りの小学生たちが劇場で宿題をしたり、水を飲みに来たりしていた様子を見て、劇場が地域に愛されているということを実感することができた。4日間のインターンを通して地域住民への職員の方の丁寧な対応や、文化行政への強い思いが、30年以上の積み重ねとなって、地域に根づいた劇場を実現しているのだと痛感した。

行政の公的な財源を利用して運営されているピッコロシアターのような公共劇場の場合、芸術文化の意味や必要性について社会全体からどうやって理解を得るかということは、常に問題になってくる。インターンを通して教えていただいたピッコロ劇場の活動内容を振り返ってみると、今後公共劇場制作が発展していくうえで、2つの理解の促し方があるのではないかと考えた。すなわち、1つ目は社会的に広く注目されている問題を、舞台芸術を通じて具体的に改善し、さらに広報活動を通じてその活動や結果を社会に知ってもらうことだ。ピッコロシアターのこれまでの活動を振り返ってみれば、たとえばピッコロ劇団の団員による民間のコミュニケーションワークショップや、フリースクールでの生徒の心のケアなどが芸術文化の社会的意義を端的に説明するうえでの好例になるのではないだろうか。また、聴覚障がい者の観客のための字幕サービスや、震災の被災地での公演などもピッコロシアターの最近の活動のなかで注目すべき活動であるといえよう。さらに、ピッコロシアターではこのような活動を新聞などのメディアを通じて社会に発信しようとしている。どんなに良い活動をしていても、それを認知してもらうことができなければ、社会からの理解はなかなか得ることが難しいからだ。コミュニケーション問題や社会的マイノリティーへの観劇補助など、県民や国民の多くが取り組みの重要性を感じている対象に公共劇場が関わり、その活動をメディアを通じて積極的に紹介していくことで、アートや文化に対する行政の重要性を広く理解してもらうことができるのではないだろうか。

さらに文化行政の大切さを浸透させるもう一つの方法は、前述した社会の要請に短期的に答えることとは別に、より長期的なスパンで社会全体に芸術に親しむ機会を根付かせていくことがあげられると考える。そもそも、芸術や文化は多くの場合、短期的に数値やデータでその社

会的効用を明確に示すことができる性質のものではない。しかも、文化や芸術の重要性は、やはり芸術を鑑賞したり、自ら創作したりした直接的な経験がないと実感しがたいのだが、劇場や劇団は、病院や学校のように誰もが一度は必ず利用するというわけではないため、芸術の重要性を一般に広く理解してもらうことは難しい。そのためピッコロシアターのように、プロデュース公演とピッコロ劇団の自主公演を通じて 30 年以上ものあいだ多様な舞台芸術作品を幅広い層の人々に継続的に提供しようとしてきた活動は、社会に芸術の意義を根付かせるうえでとても意義があると思う。また、ピッコロシアターは、観客に作品を見せるという一方通行の活動だけではなく、地域住民の芸術創造の場としての役割も担っている。通常の貸館業務をとおして、住民が自分たちの作品制作を行える場を提供しているだけでなく、劇場自体が演劇学校と技術演劇学校を併設することで、地域の舞台芸術をリードする人材育成を続けている点はとても特徴的だ。近年、ますます首都圏や大都市への文化事業の一極集中が続いているが、県が主体となって地方の芸術文化の振興を図ることで、芸術文化に親しむ人の裾野が広がっていくことへつながるのではないだろうか。

今回のインターンを通して、ピッコロシアターの革新的な活動や特徴についてより深く理解することができたが、一方で、さらに発展的な文化行政を実現するために今後必要であると感じた点もいくつかあった。

まず、私が『砂壁の部屋』のチケット切りをしながら気づいたことは、客層の偏りと職員の数の不足状況である。私たちインターン生は公演初日と二日目に会場の担当をさせていただいたのだが、二日とも観客は中高年の観客や劇団関係者が多く、20代や30代の一般客はあまり見受けられなかった。また、職員の皆さんのお話を伺うと、人材や財源が限られているため、業務量に対して職員数が十分ではなく、観客層の新規開拓まで手が回らない状況であるということだった。確かにピッコロシアターは営利目的の組織ではないが、やはり幅広い層に芸術文化に接してもらうためには、観客の動員数の増加や、若年層を含む観客層の拡充が望まれるのではないだろうか。また、若手職員がまだ十分に育っていないにもかかわらず、ベテラン職員の定年退職が近づいているという問題点についても聞かせていただいた。職員一人ひとりの業務負担を減らし、より充実したピッコロシアターの運営のために、国や県などの行政は、新たな人材と職員を雇用・育成するためのさらなる財源の確保を図る必要があるのではないだろうか。

終わりに

今回のインターンでは、実際に県の文化行政の中で地域住民と顔を合わせながら日々働いていらっしゃる職員の方々から話を聞き、私がこれまで悶々と考えていた文化行政に関する様々な疑問について現場職員の方々に直接質問させていただくことができた。今回のインターンを通して、現場の声を聞くことの大切さや文化行政の現場の実際を知ることができたと思う。お忙しいなかにもかかわらずレクチャーをしていただいた職員の皆様や、インターンの企画・対応をしてくださった尾西さんと新倉さん、大阪大学の永田教授、お世話になった方々に深く感

謝を申し上げたい。

2.2 劇場制作研修 受講生のレポート②

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 廣嶋 萌衣

まずはピッコロ劇場・劇団インターンシップ研修の概要についてまとめたいと思う。

一日目、まず初めに日本の文化施設について説明が行われた。最初に投げかけられた質問は、「芸術が存在する意義は何か」というものだった。芸術が無かったとして、生死には直接関係しない。そのうえで芸術を税金で促進する意義とは何だろうかということである。岡本太郎やパブロ・ピカソは、政策として芸術の街を作ることを提唱した。外部の人間が観光としてその街にお金を落とし、経済を回すというものである。しかし、演劇の意義は必ずしもそこにはなく、平田オリザ氏の考え方を引用しながら、人とのコミュニケーションを根本に持つ演劇は、「教育」として取り入れられることで人と人のかかわり方を育むのではないかということが説明された。つまり、即効性はないが、長い目で見て人を生かす力を持つのだということである。また、日本は高度経済成長を経て、週六日労働制から、政策として余暇をとることを促進し始めた。レクリエーション施設を自身で持つことのできた大企業と異なり、施設を持たない兵庫県の中小企業は、協力しあってレクリエーション施設を作ることを働きかけたという。そしてその結果、超過県民税と、県の中小企業から募った利益の 1%の寄付金を財源として、総工費 13 億円をかけてピッコロシアターが施工された。人が多く、県庁所在地である神戸ではなく尼崎市が選ばれたのは、演劇が盛んで中小企業が多かった尼崎市の特色ゆえである。

次に、ピッコロシアターの建物の概要説明が行われた。ピッコロシアターは、収容人数や用途の異なる三つのホールを持つ。大ホールの客席数は、ふつう規模の小劇場が 2000 席であるのに比べ、400 席と小規模である。また、舞台を大きく、多用途に使用するために花道や奈落の設備を備えるほか、舞台そのものの奥行きは非常に広く、舞台空間として使用できる広さは 15 メートル四方である。また、中ホールでも同じ大きさの空間をとることが可能で、大ホールの使用を見越して利用する客も多い。そして、貸出される照明機材や音響設備も非常に充実している。しかし、ピッコロシアターの設備は発表の場のみを提供するのではない。資料・台本選びから発表まで一連の行為を提供する場である。そのため、脚本や書籍を数多く所蔵する資料室や、また演劇だけでなく書道や華道の展示などが行われる展示室、現在は利用率の低下から洋室に改装されたが、日本舞踊のための和室など、誰にでも使用することができるその他設備をも有している。また、使用料は規模に比べて破格に安く、小規模の客席数も相まって学生劇団や小規模の社会人劇団の使用も比較的容易である。ピッコロシアターは、地元民を中心に観客として演劇など芸術に触れる機会を提供するだけでなく、芸術・文化の発信者として地元民が関わる機会を多く与えることができるのである。芸術・文化の受信者ではなく、発信者としての関わり方を得ることができる点において、公立劇場として特筆されるべきではないだろうか。

その次に行われたのはバックステージツアーである。これは、実際に仕込みが行われていた劇団公演『砂壁の部屋』の舞台の裏側を見学するというもので、初日で最も印象的であった。

ピッコロシアターの歴史ともいえる、多くの衣装がそのままにストックされた劇団の衣装部屋や、舞台監督が操作する開演ブザーなどの操作ブースなどを見学させて頂いた。大ホールにある先ほど述べた奈落の設備は、更に地下に大規模な設備があり、安全性を確保するために細心の注意が払われていた。また、舞台上から舞台美術をつるす吊り物の設備は、重しを手動で載せる昔ながらの単純な機構ではあるが、阪神淡路大震災でもずれはほとんどなかったと聞いた。

初日最後に受けたのは、ピッコロ演劇学校に関する説明である。これは、日本でもほとんどない公立の演劇学校で、芸術・文化に関わる18～35歳までの教員や文化活動をする人には門戸を開いている。研究科と本科があり、それぞれが卒業公演を打つ。両方の稽古場を確認させて頂いたが、身体性や舞台での見せ方、コミュニケーションを意識した様々な指導方法が行われていて、とても興味深かった。公立であるためその授業料は授業の専門性と比較すると安く、また夜に行われることが多いため、芸術・文化に興味のある人への門戸は広い。演じる側になる勉強をこのように手軽にできるのは、とても有意義だと感じた。

二日目には、まず初めに兵庫県の文化政策に関する説明を受けた。ピッコロシアターは兵庫県の県立施設である。兵庫を県は芸術・文化に力を入れている県であり、書道や華道・演劇に至るまでの様々な形の芸術を促進している。その一環として芸術文化振興ビジョンを制定し、地域に根差した文化の発展に努めている。創造・発信の機会として東京パラリンピックを挙げているのが印象的で、またピッコロシアターの活動としては具体的に、前にも述べた聴覚障がい者のための公演の積極的PRなどを視野に入れているのが興味深かった。

次に、公演で観客に実際に配布するチラシなどの挟み込みの作業に参加させて頂いた。ピッコロ劇団部の方、劇場の方たちと職員総出での作業で、地味だが忍耐力のいる作業だった。親し気な会話の飛び交う作業で、仲の良さや公演への期待が窺えた。

二日目最後には、ピッコロ舞台技術学校の説明が行われた。舞台技術学校は、演技ではなく、美術・照明・音響の3つの科に分かれて舞台の裏方を学ぶ。演劇学校と同様、18～40歳までの年齢制限はあるが、教員や文化活動をする人には門戸を開いている。ちょうどインターンをさせて頂いた時期が舞台技術学校と演劇学校の本科が共同で行う卒業公演の準備期間であり、大道具のペンキでの塗装作業や、舞台機構を確認している様子を見学できた。大ホールで公演を行うため、舞台美術の規模は大きく、展示室を借り切って作業を行っていた。また、照明講習にも参加する機会を得た。カラーフィルターや照明機材を実際に用いた授業で、実践的な授業に様々な年齢層の受講者が参加していた。

三日目は、まず初めに『砂壁の部屋』のゲネプロを観劇させて頂いた。演出の岩松了氏が舞台前方の中央で真剣な表情で観ていた様子が印象的だった。また、終演後に役者を呼び、演技面での指示や動きの修正、音響・照明スタッフと話し込む時間があり、演劇ができていく最後の段階を見学できたように思う。

次に、地域文化施設としてのピッコロシアター職員の役割を説明された。また、やはり県立ということで特筆すべきは地域性という点である。私個人が尼崎市民であるのでより親しみ深

いではあるが、子どもにも見やすい演劇のチラシを小中学校へ配布したり、また小学生を上演に招待したりなど、より地域密着型の劇団の形を示しているようであった。小学生が危険を感じた時にすぐに駆け込めるような、平たく開けた空間づくりをしていることも、ピッコロシアター独特の色ではないだろうか。

次に、ピッコロ劇団の制作補助の作業をお手伝いさせて頂いた。ピッコロ劇団の建物はピッコロシアターとは別にあり、稽古場や、大道具の保管、作業を行うスペースがある。そこで、チケットの優待等のサービスを受けられるピッコロサポートクラブの会員への会報誌の宛先シールの貼付や、その割り振りを行った。やはり地元尼崎の会員が多かったが、福島県や山口県など、目に入るだけでも遠方の会員も多く、固定ファンが広範囲にいることに驚いた。劇団員からの手紙や、グッズの封入なども行っていて、こまやかな心遣いで会員とピッコロ劇団とをつなぐ縁を作る努力を感じた。

その後、実際に『砂壁の部屋』の当日制作に参加した。インターン生に割り振られた仕事はチケットのもぎりや当日パンフレットの配布で、その他受付設営準備や、トイレ・ランタイムの案内ができるよう説明を受けた。制作チーフの方がトランシーバーを介して舞台監督の方と、会場内の状況や設営状況・時間を綿密に報告している様子から、お客様が快適に観劇できる環境づくりへの誠実さが伝わってきた。また、ピッコロシアターは公立劇団も併設しているという特質から、招待の数が多く、公演初日は招待のお客様が多くの割合を占めるようである。そのため、劇場の方が多くの招待されたお客様と最近の話題や評判を話している様子が印象的だった。私自身はこの日はチケットのもぎりを担当したが、正直なところとても緊張した。この緊張とは全く関係ないが、この公演が開場するために関わる人間のほとんどを観客は知らないまま、前評判やフライヤーのあらすじのみを見て劇場に来場するのだと思うとなんとなく感慨深かった。

最終日は、初めに広報・宣伝業務についての説明を受けた。劇場における広報・宣伝業務は二つに分けられる。ホールが存在を広く知らせることと、公演やイベントを告知することである。ホールの貸し業を主とする劇場なら、前者に比重を置く必要はないだろう。しかし、公立劇場であるピッコロシアターにおいて、前者は大きな役割を持っている。公立劇場としてのピッコロシアターそのものの存在への理解を、非理解者をターゲットに置いて増やしていかなければならないのである。ちなみに、広報とは新聞・雑誌・テレビなどに情報を提供し、公演を紹介してもらうことで、宣伝とはチラシやポスターの作成に代表される、有料で公演の告知を行うことである。作品を世間に知ってもらうためには、まず劇場内部の人間が公演の良さを理解し、セールスポイントを共有しなければならない。そして、公立劇団が打つその公演が、いかなる社会的・地域的・芸術的な意味を持っていて、どのような媒体で宣伝するのが効果をもたらすかを考えたうえで宣伝活動を進めなければならないのである。ピッコロシアターの広報・宣伝業務は職員一人のみで行われており、その上でその業務内容は多岐にわたる。上記業務の他、フライヤーのイメージをデザイナーや脚本家とすり合わせて期限内に完成させたり、また公演を打つにあたって記者会見を開く段取りをつけたりする。今回話を聞き、ピッコロシ

アターという公立劇場の広報・宣伝業務は、一般の宣伝業務に加えて、劇団・劇場そのものの存在意義を念頭に置いた業務を行う必要があることを改めて感じた。

今回インターンを行って、地元にあったのにも関わらずピッコロシアターのことを何も知らなかったことに驚いた。だが今思えば、学校の配布プリントの中に公演のパンフレットが入っているのはほかの地域ではなかなかあることではないだろう。劇場が地域にあり、演劇などの芸術文化が開かれた状態である貴重な例だったのである。演劇が特定の人間にしか作用しないものではなく、「教育」として地域に根差し、人を育むことができるものとして認知されるため、ピッコロシアターは大きな役割を負っているのだと感じた。長い歴史を持つ劇場だが、公立劇場として負う役割は新しく、長期的なスパンでないと果たせるものではない。これからの演劇の在り方を変える一つの可能性としてのピッコロシアターの存在は、これからも存在感を増すのではないだろうか。

2.3 劇場制作研修 受講生のレポート③

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 矢口 奈津実

10月25日、この日はいくつかのレクチャーとバックステージツアー、演劇学校の稽古見学と密度の濃いスケジュールでした。レクチャーは兵庫県が打ち出している芸術に関連した方針や、ピッコロ劇団・ピッコロ演劇学校の事業内容についてです。ピッコロ劇団の拠点である兵庫は「芸術文化立県ひょうご」という理念を平成16年から打ち出しており、これは芸術文化が暮らしに息づき、芸術文化で人や地域を元気にする社会の実現を基本目標として掲げています。大阪府は芸術振興の補助金を大幅に減らしており、芸術を民間団体が支えているというのが現状ですから、兵庫が県をあげて振興にとり組んでいることはとても画期的なものであると言えます。この取り組みが掲げる成果指標には、「住んでいる市・町で、芸術文化に接する機会があると思う人の割合」「住んでいる地域で、自慢したい地域の宝（風景や産物、文化など）があると思う人の割合」をそれぞれ10%近く上げるというものがあります。ここで、数値で測る成果指標は意味があるのかという意見が出され、議論が交わされました。任意選出された方々に回答をお願いするわけですので、毎回数値は異なるわけですが、そもそも問いかけの文章のニュアンスによって影響されることも多いうえ、意識する人の割合が高くなることと実際に芸術に触れる人が増えることは直接的に見て取れるとはいえないのではないかという話に落ち着きました。しかしそれに代わることのできる手段は見つけられませんでした。次にバックステージツアーでは、奈落の機構とその安全管理、袖口の様子や幕をおもりで制御していることの説明をお聞きしつつ見学しました。この時はピッコロ劇団の公演の「場当たり」中だったようで、袖にいる衣装を着た役者さんは真剣な面持ちで、客席の演出部もピリピリした空気だったように感じました。音響照明のオペレーションをする部屋で機材も見せていただき、なかでもスポットライトの操作部屋が自分の中でイメージがつきやすく、この距離から動き回る人に光を当てる技術の高さに驚きました。最後に演劇学校の仕組みや成立の背景についての説明をうけ、稽古風景を見学しました。小ホールでは演劇学校本科生による発表公演のための「場当たり」が行われており、立ち位置を決めて「バミリ」をするという現場をじかに見ることができました。中ホールではその一週間後に行われる演劇学校研究生・舞台技術学校生による公演のダンスパフォーマンスの練習でした。手の向きなどといった細かい振りの統一、センターに持ってくる椅子の有無について次々と決まっていきました。どうしても、劇場で観るものは完成形であり、もともとこのような演出を希望していたのだろうという風に思い込んでしまいましたが、そうではなく、むしろ稽古場で何度も違うことを試してみて、役者が演じやすく演出の方針に沿うような決定が順に下されるものだという事を再確認しました。

26日、この日はレクチャー、チラシの挟み込み作業、舞台技術学校の授業見学でした。レクチャーは兵庫県の文化政策、舞台技術学校の事業説明です。兵庫が芸術振興に積極的である以外に、ピッコロシアターが尼崎に位置している理由は何かという疑問がわき、質問させていただきました。それは、前から労働運動が盛んであったことと、中小企業が多いことでした。ピ

ピッコロシアターは、兵庫県の企業の超課税分を基に創られており、そのことにも中小企業の多さに助けられていたことの一因があるようです。また、「交通戦争」についてのお話も興味深かったです。車が導入されたが普及はまだであったころ、車を普及させることで近代化を推し進めたいという思いのあった政府は、車を兇器であると思われることを防ぐため、車対人の事故への対策・便利さの宣伝に全力を注ぎました。しかしその一方で、その数倍もの三万人を超える自殺者に対しては手を打ってきませんでした。こんな時、芸術の中でもコミュニケーションが重要となる演劇は、このような悲しい状況の解決策になりうるのではないかという内容でした。私はその通りであると思います。芸術は正解がないがゆえに科学や正論が通用しない領域に簡単に入ることができます。医学とは違って、目に見える形で直接的に人の命を救うというわけでないだけで、芸術も人に対していい影響を与えられる力があるからこそ芸術は人の心を動かすと思うからです。そのあと挟み込み作業へ。職員の方々も同じように挟み込みをするということと、持ち込み団体の方と共に挟み込みをするのではないことに驚きました。舞台技術学校の見学では、舞台コースの方々が大道具のタタキ、特に緑色にパネルを塗っているところと照明コースの方々がカラーフィルターの見本と共にプランを練っているところでした。特に照明の方々が二手に分かれてこれらの色変えを競っている場面では和気あいあいとしてみんなが楽しんでいる様子が伝わってきました。

27日はゲネプロ、そして翌日もレクチャー、一ステージ目の制作補助作業を行いました。レクチャーでは、公立の文化施設には鑑賞用の大劇場という道もあるが、ピッコロ劇場は市民の発表用の小さな劇場ということに主眼を置き、近くにある兵庫県立芸術文化センターとのすみわけを行っているということを知り、その運営方針について納得できました。また、利用者のニーズに合わせて貸し部屋の和室を洋室に変えたり、毎朝の施設チェックをしたり舞台の安全チェックを行っているそうです。中でも、時代に合わなくなってきた機材は、使用することが可能でも新しい機材に買い揃えるらしく、これは1年前から予約していたお客様に不便やトラブルが生じないようにという利用者へのやさしさだと思います。また利用したいと思わせる、温かい雰囲気がこの劇場の魅力なのではないでしょうか。その後開場準備といってアンケート用紙記入用のペンをロビーの机に並べる、ホールへの階段に座席案内の紙を貼るということをし、開場中はチケットのもぎりを担当しました。立場がお客様ではなく公演団体としてお迎えすることの、いつもの立場の逆という奇妙さは拭えませんでした。28日は平日の昼からのステージのため、少し客足が伸びなかったという印象でした。しかしわれわれは制作補助の仕事に落ち着きが生まれてきており、お客様としっかりアイコンタクトを取ったのちにもぎりをすることができたように思います。また、劇場に行って関係者の方々にあいさつをする貴重な社交の場なのだと気づきました。このような人と人とのつながりを生み出しているからこそ芸術振興は進むのだと思います。

私は、以前から興味を持っていた舞台技術学校についてのお話やバックステージツアー、職員の方々からのヒアリングに惹かれ、この実習を希望しました。その段階で知りたいと思っていたことやお聞きしたかったことを、わかりやすく教えていただけたことが何よりありがたか

ったです。また、インターンという名前が付けられている通り、身近な就職活動や将来について尋ねて下さることや体験談を話して下さることが多かったことも貴重な体験となりました。それは、私がまだ2回生だからといって考えることを先延ばしにしているところがあるからで、このインターンに参加していなければ、このまま過ごしていたように思います。一口に演劇に関わる仕事といっても、実際に体を使う仕事から、演劇に関わりの少ない人向けに絞った宣伝や広報、利益を第一とせず市民の芸術振興に影響をもたらすような演目のプロデュースを行う仕事など、様々な形があることが分かり、演劇に絞った場合でもこのように多数のかかわり方があるのですから、将来の選択肢を思い込みで狭めてはいけないと身にしみました。